明石市立大蔵中学校だより「2019 年 11 月 11 日（第 28 号）」

書あり 師あり 友ありて

夢を育て、自立を促す子育て

～平野　真理子さん（2019 年度あかしこども広場子育て講演会）のお話を聴かせてもらって～

学校長　平　田　高　之

11 月 9 日（土）に、あかし市民広場で、卓球ワールドカップでも大活躍した平野　美宇選手のお母さまの平野　真理子さんの講演会がありました。とても笑顔の素敵な方で、お話の内容も大変素晴らしく、子育だけでなく、教員に携わる者としても大変参考になりました。せっかくですので概要をご紹介させてもらいます。平野選手はもちろん、お母さまのこともご存じの方は多いと思いますが、まずはプロフィールの紹介から。

静岡県出身。山梨県中央市在住。平野卓球センターの「平野 M's 卓球スクール」チーム監督であり、美宇さん、世話さん、亜子さん三姉妹の母。夫とは筑波大学卓球部で共に主将を務められました。小・中・特別支援学校などで約 10 年間勤務した経験を活かされ、下は 3 歳から上は 80 代の約 100 名の老若男女に卓球を教えておられます。2017 年 6 月に自著「美宇は、みう。夢を育て自立を促す子育て日記」を上梓。

最初は美宇さんの子どもの頃の話で、大人しく、おだやかで、マイペースだけれども、今の卓球の試合を見ていても感じますが、負けず嫌いで、自分の決めたことにひたむきになるお子さまだったようです。3 歳の頃から、ご自身の卓球教室に連れて行っていたけれども、他の生徒さんの邪魔になるので、別の部屋で待たせていたところ、半年後に「お母さんの卓球教室に入れてほしい。」と言われたそうです。それまで何かを買ってほしいと言うことがなかったので、「お母さんと練習をして、みんなに迷惑がかからないようになったら入れてあげる。」ということで半年間お母さまと練習し 4 歳から始めたそうです。**「「出会うきっかけ」そして「その後の環境」の大切さ、さらに、「自分からやりたい気持ち」を持たなければ本気にならない」**というお話をされました。長女の美宇さんはオリンピックを目指す世界的な選手ですが、二女、三女は県大会で活躍するレベルの選手ではあるようですが、あくまで趣味でやっていて、亜子さんの将来の夢はパティシエだそうです。決して娘さんたちに強要した訳ではないとお話されていました。それでも、いろんなことに挑戦するよう、「楽しそう。やってみたいな。」というように、「はじめるきっかけ」は作られたそうです。例えば、料理を子どもさんと一緒にさせて、娘さんのお弁当はそれぞれが手作りさせおられるようですが、**「「子どもは好奇心の塊。自分でやるより時間は 3 倍かかるけど、後で　10　倍楽になるし、自分の方が先に死ぬので自立させることが大切。油を使うのも、知らないから危ない。」**というお話には説得力がありました。

この後、ご夫婦での子育てについて話をされました。ご主人は、多くの父親と同じく日本社会の中で仕事が忙しく、朝は子どもが起きる前に仕事に出られ、寝た後に帰って来るという生活だったようです。美宇さんの卓球について、「母親の夢を押し付けているだけではないか。」と責められた時に、普段の様子を知らない中で理解してもらえないので、ある試合で、ベンチに入ってもらい、真理子さんが観客席にいるようにしたそうです。美宇さんは試合中、ベンチを見ずに観客席の母親を見ている姿に、娘さんと母親との信頼関係の深さと、自分とのなさに痛感し、それ以降は応援してくれるようになったそうです。ご主人には**「裁判官でなく弁護士でいてほしい。」とよく言われたそうです。正義をふりかざす裁判官では、隠そうとするけれども、弁護士ならすべて話ができ相談できる。**自分でも答えは分かっていても聞いてほしいんだという話をされ、これは保護者の皆さんにだけでなく、私たち教員も生徒に対して「裁判官でなく弁護士たるべき」だと共感させられました。

世界的なプレーヤーである美宇さんがプレッシャーのかかる時のサポートはという話の中では、リオオリンピックのメンバーを外れた大変落ち込んでいた時のエピソードを紹介されました。「自分は世界で戦ったことがないので、実際に世界で戦った人の力を借りました。松岡さん、イチローさん、錦織さんの本を贈りました。」また、1 年半前に、試合で勝てなくなった時に、周囲の期待に対する責任感から 3 週間部屋に閉じこもって卓球ができなかった時があったそうですが、その時には、とにかく話を聞き「卓球をやめて山梨に帰ってきてもいいよ。」とも伝え、自分の心と素直に向き合えるようにしたそうです。そこで、美宇さんは「オリンピックの夢はあきらめたくない。」という自分の気持ちに気づき、今に至っているそうです。

子育てをしている時に気をつけておられることはと聞かれ

「ほめる（認める）３：しかる１

を心がけています。子どもががんばったけど失敗する、試合に負けた時に、頭ごなしにしかってもシャッターがらがらですよね。良かったところをほめて、それから、失敗したところを映像を見ながら、自分で気づかせる、どうしたら良いかを一緒に考えていくようにしています。」

また、「勉強でも同じで、算数の問題で同じところにつまずく。何でできないのではなく、一緒に問題をやり、よく間違えるところを、自分がわざと間違えて気づかせ、子どもを先生役にして教えることでより覚える。」等、子どもが自分からやろうという気持ちを持たせるためにいろいろ工夫をされるそうです。

「子どもは親の言う通りにはならない。親の言う通りにならないは当たり前。親が失敗しないように先取りするのではなく、子どものつまずく様子を見て、つまずいた時には、なぜつまずいたのか一緒に考える。」というお話をされました。これも、子育てだけでなく、「子ども」を「生徒」に、「親」を「教師」に言い換えれば、私たちにも当てはまると感じました。

その後、三女のお話になりました。今 NHK では様々な番組で発達支援をテーマに取り上げていますが、先日、三女の亜子さんのことが番組で取り上げられていました。亜子さんは現在中学３年生で、子どもの頃から卓球を始め、県レベルの選手なのですが、バックハンドへのこだわりが強く、フォアハンドで打てる球でもすべてバックハンドで取っていたのを、本人から言ってくるまで決して強制しなかった。しかし、年齢が上がるにつれて、対戦相手が研究し、フォアハンドをつくようになり、試合に勝てなくなってきた時に、彼女と一緒に映像を見て自分の弱点に気づかせ、今はフォアハンドの強化を図っているという内容でした。

3 歳の時に、階段でこけてけがをしたので整形外科に連れて行った時に、発達障害の疑いがあると言われ、ご自身の特別支援学校・特別支援学級の経験はありながらも、驚きと自分の子どもがとすぐには受け入れることができずショックは大きかった。しかし、子どものために自立できることをいかに早くから始めることが大切かを考え、病院に通いはじめ向き合うようにされたそうです。

最後に、現在の卓球教室にも障害のある方が 10　名ほどおられるそうですが、今のご自身の夢は「障害のある方とない方、男女、年齢に関係なく、みんなが自然に幸せに暮らせるようになるための架け橋になりたい。」とお話され、**「大人が夢を持つ。そしてその夢に向かって笑顔で頑張る姿を見せることで、子どもが大人になることへの夢を持て、その夢に向かえるすてきな子どもに育ちます。」**というメッセージでお話を締めくくられました。